

第一部 『源氏物語』 翻訳研究の位置付けと方法 9

序 11

第一章 文学研究における受容の研究と「受容理論」の概観 14

一 「享受」と「受容」 14

二 受容理論 17

第二章 翻訳研究の方法 21

一 これまでの英訳の研究の例 21

二 目標言語における意味内容の移し換えの実相 27

1 ウエイリーの脚注 27

2 「夕顔」冒頭文 29

3 a lady → the lady 35

4 現代日本語訳 40

5 まとめ 43

三 おわりに 44

第三章 現代日本語訳と英訳 48

一 はじめに 48

二 原典への忠実性 51

三 「ルビ」と「漢字」という「翻訳」 58

四 おわりに 61

結 62

第二部 ウエイリー訳『源氏物語』の諸相 69

序 ——ウエイリー翻訳研究の意義—— 71

第一章 ウエイリーの翻訳観と当時の評価 77

一 浮舟の侍女右近の言葉の英訳をめぐって 77

二 ウエイリー使用の底本と訳文の関わり 83

三 ヴァージニア・ウルフによるウエイリー訳『源氏物語』書評をめぐって 87

1 ウルフとウエイリー訳『源氏物語』 87

2 おのれひとり笑みの眉ひらけたる 88

3 プリンズ光源氏の生涯と冒険 91

4 アンヒロイック・ヒル 94

5 老成した文明との対比 99

6 西洋の大家家との比較 101

7 書評のあと 101

第二章 ウエイリー書き入れ本『源氏物語』について 106

- 一 「書き入れ」の信憑性 106
  - 1 はしがき 106
  - 2 「宿木(寄生)」の巻の二分割 106
- 二 ウエイリー書き入れ本の存在と書き入れの概要 116
  - 1 ウエイリーがみた『源氏物語』 116
  - 2 ウエイリー蔵書(ダラム大学)の『源氏物語』 120
  - 3 ウエイリーの書き入れ 125
  - 4 まとめ 133
- 三 「書き入れ」内容について 134
  - 1 「書き入れ」の分量と種類 134
  - 2 「書き入れ」の詳細と考察 135
  - (1) 文章或いは単語の脇に傍線が施され、意味が記されているもの 135
  - (2) 引歌に関する書き入れ 165
  - (3) 漢字の読みに関する書き入れ 184
- 四 おわりに 205

第三章 ウエイリー訳『源氏物語』における省略について 211

- 一 ウエイリー訳における「鈴虫」の巻の省略 211
- 二 「若菜」上下巻における省略の分量 215
- 三 「若菜」における和歌と儀式などの省略 220
  - 1 「若菜」における和歌の省略 221
  - 2 省略されている儀式の場面 222
- 四 後日譚の省略と朱雀院の婚選び 224

五 おわりに 229

第四章 『源氏物語』以外のウエイリー訳における省略についての考察 233

- 一 ウエイリー訳『枕草子』の省略 233
- 二 ウエイリー訳「虫めづる姫君」にみられる省略 236
- 三 ウエイリー訳『西遊記』の省略 239
  - 1 ウエイリー訳『西遊記』のタイトル 239
  - 2 省略されたエピソードと翻訳されたエピソード 240
  - 3 ウエイリー *Monkey* の序文と底本 246
  - 4 英訳における省略と要約 251
  - 5 まとめ 253
- 四 おわりに 254

第五章 「若菜」の巻におけるウエイリーの操作について 258

- 一 はじめに 258
- 二 「若菜」上下巻の区切り 259
- 三 ウエイリーの本文移動 262
- 四 ウエイリー操作の理由 269
- 五 おわりに 270

結 271

第三部 『源氏物語』 翻訳の諸相 275

序 277

第一章 卷名と呼称の英訳 280

- 一 卷名英訳の変遷 280
  - 1 ウェイリーの卷名の翻訳方法 280
  - 3 一応定着したとみなせる卷名 284
  - 4 「朝顔」 283
  - 4 卷名における、単複数形の相違と定冠詞及び不定冠詞の有無 285
- 二 呼称の英訳 289
  - 1 呼称英訳の問題点 289
  - 2 呼称英訳の諸相と機能 292
  - 3 現代日本語訳における呼称の翻訳 306
  - 4 タイラー訳におけるイタリック体の三人称の機能 308
  - 5 三人称としての「人」の英訳 313
  - 6 マッカーラ訳における呼称の英訳 315
  - 7 まとめ 319

第二章 和歌の英訳の変遷と『源氏物語』の和歌英訳について 324

- 一 はじめに 324
- 二 バジル・ホール・チェンバレン（一八五〇—一九三五） 327
  - 1 *Japanese Poetry* 328
  - 2 チェンバレンの和歌英訳における詩型 331
- 三 ウェイリーの *Japanese Poetry: The 'Uta'* 334
  - 1 ウェイリーの五行訳 336
  - 2 ウェイリー訳和歌の実相 339
  - 3 ウェイリー訳における掛詞 341

四 ブラワー、マイナーの *Japanese Court Poetry* 344

- 五 初期の物語翻訳における作中和歌の翻訳 349
  - 1 デイキンズ訳の『竹取物語』 349
  - 2 アストン著『日本文学史』における物語作中和歌 354
- 六 『源氏物語』における和歌の英訳 357
- 七 おわりに 360

第三章 『源氏物語』における散文部分の翻訳の諸相 368

- 一 はじめに 368
- 二 登場人物の心中表現の英訳 369
  - 1 叙述の焦点 369
  - 2 タイラー訳における語法の英訳 372
  - 3 タイラー訳における多様な語法の混成 378
- 三 『源氏物語』の会話文内に引用された会話文の英訳 384
  - 1 語りの雛型と会話文の表記 384
  - 2 やうなど 385
  - 3 英訳における会話文の分割や統合 391
  - 4 叙述場面の焦点と翻訳 396
  - 5 語法の転換 399
  - 6 まとめ 403
- 四 形骸化している言葉の英訳 406
  - 1 談話標識 406
  - 2 英訳における「かくて」 409
  - 3 談話標識としての「かくて」 415
  - 4 『源氏物語』における「かくて」 416
  - 5 まとめ 417
- 五 英訳における主人公光源氏像 419
  - 1 ウルフのオーランドーそして現在の光源氏像 419
  - 2 光源氏容貌描写の英訳 421

3	光源氏が紡ぎ出す光源氏像	423
5	語り手の評言による光源氏像	426
7	まとめ	428

4	他の登場人物による光源氏像の形成	425
6	オズワルド・ホワイト	427

結 436

結 語 438

初出一覧	440
あとがき	443

主要語彙・人名・書名索引 巻末 86

主要参考文献一覧 巻末 78

『源氏物語』54帖巻名英訳一覧表 巻末 75

ウエイリー訳「若菜」上下の省略部分一覧表 巻末 68

ウエイリー全書き入れ一覧表 巻末 35

付節 英文論文 Coming to Terms with the Alien: Translations of *Genji Monogatari* 巻末 1

緒 言

本論は英訳の研究であるが、英語を母国語としない、『源氏物語』を専門とする人間によるものである。その点において、英語を母国語とする研究者の方法とは自ずから異なる点も多々あると思われる。だが本論の翻訳研究は二つほどの最終的な到達点への道程であると思っている。

まず本論における翻訳の研究は、はじめに「原文ありき」である。「原文」とは言っても、一般には実質的に校訂本文で読むのでこの「原文」は実体的ない、言うなれば、抽象的概念としての「原文」を指す。このような研究を行う究極の目的の一つは原典回帰にあるのだが、原典回帰とは、ここでは原典の再構築という意味ではなく、原典の理解と解釈の深化によってより原典に近づくというぐらいの意味で使う。もちろんこれが唯一絶対の翻訳研究の目的であると言うのでは決してなく、英語を母国語としないものの翻訳研究のあり方としての一つの目指し得る方向ではないかと思う。そして英語に翻訳された『源氏物語』を研究の素材として、否定的側面を掘り起こすことに力点を置くのではなく、建設的に扱うことに意味があると考ええる。

またもう一つは、『源氏物語』という文学作品を固定し、完成した作品として研究するという姿勢ではなく、譬えて言うなら、中世における古注釈書などの存在を『源氏物語』の作品世界のひとつの姿として取り込んでみていくという「受容論」的な認識によってこの古典作品を理解するという研究姿勢と同じようなところがあり、『源氏物語』を受容史的に生成する総体として捉えるという姿勢である。英訳された『源氏物語』はそれ自身自立し、独自の世界

# 第一章 文学研究における受容の研究と「受容理論」の概観

## 一 「享受」と「受容」

異なる言語で書かれた文学作品を翻訳するという行為は、文学の受容の一形態である。つまり、翻訳研究は受容研究の一部に属するということにもなる。よって、翻訳研究とは何かということの確認に入る前に受容の研究とは何であるのか簡単に見ておく必要がある。まず文学研究の現場においては「受容」という言葉の他に「享受」という言葉も使われているので、これらの言葉の用法を確認することから始めたい。一般的な感覚としてどちらも「受け入れ」という意味の範囲にあることは容易に想像がつくが、文学研究の実際においてこれらの用語の意味そして用法の相違があるのか、ないのか、或いは同義として同等な使用法がなされているのか、みてみよう。

はじめに辞書的な定義をみておく。ともに『日本国語大辞典』（引用は第一版からだ、第二版も定義に大きな変更はない）からの定義を次に引く。

「享受」 与えられた、ある物事を受けおさめること。多く精神的、物質的な利益を受けて、それを味わい楽しむことにいう。

「受容」 1. 受け入れること。取り入れること。

## 2. 鑑賞の基礎をなす作用で、芸術作品などを感性に受け入れ、味わい楽しむこと。

「享受」の定義においては、何を享受するかという点についての規定は特にない。「受容」の定義の場合、ここで取り上げるもの言うまでもなく第二義のほうである。こちらでは受け入れる対象を「芸術作品」と規定している点が注目される。「享受」という語と「受容」という語の意味範囲の重なり部分はかなり大きなものではないか。受け入れる対象物を芸術作品と規定していない点において、「享受」の意味範囲に「受容」という言葉の意味は収まるとみなして良いであろう。つまり「享受」のほうの意味範囲が広いと考えていいのかもしれない。ではこれらの言葉の文学研究における用法の実際はどのようなものなのか。例えばこれらの言葉が出てくる、主に『源氏物語』の研究書などのいくつかの題目を次にざっと見てみよう。

寺元直彦 『源氏物語受容史論考』（一九七〇年）<sup>1</sup>

岩下光雄 『源氏物語の本文と享受』（一九八六年）<sup>2</sup>

伊藤鉄也 『源氏物語受容論序説』（一九九〇年）<sup>3</sup>

今井卓治編 『近代の享受と海外との交流』（一九九二年）<sup>4</sup>

中野幸一 『源氏物語享受資料』（一九九七年）<sup>5</sup>

呉羽長 『源氏物語の受容―現代作家の場合』（一九九八年）<sup>6</sup>

増田繁夫他編 『源氏物語研究集成 源氏物語享受史』（二〇〇〇年）<sup>7</sup>

鈴木健一 『伊勢物語の江戸―古典イメージの受容と創造』（二〇〇一年）<sup>8</sup>

『源氏物語』に限らず研究書の題目に「享受」や「受容」の言葉が使われているものは当然ながらかなりの数にのぼるが、右はそのほんの一部である。寺元氏の論は周知のように『源氏物語』受容研究におけるもっとも大きなテーマであるところの『源氏物語』以後の和歌の世界における源氏受容の研究が中心となっている論であり、またその後